

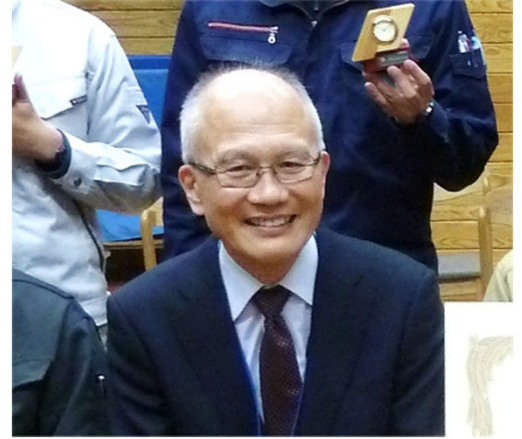
# 年頭のごあいさつ

林産試験場長 岩田 聡

2022年を迎え、謹んで新年のごあいさつを申し上げます。また、旧年中は、林産試験場に変わらぬご支援をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

さて、昨年は（昨年でしょうか）、欧米の木材価格高騰によるウッドショックも含め、私たちのくらしや仕事にいろいろな形で新型コロナウイルスによる影響があった1年だったと思います。

そんな中、三井物産の安永会長が、海外の若手社員とオンラインで車座集会を50回ほど開催したという新聞記事を目にしました。安永会長は、2015年に32人抜きで三井物産の社長になられ、とてつもなく豪快な方という印象があります。その足下には遠く及ばない内容のわずか2回、自分も林産試験場の若手職員と意見交換をしました。



意見交換では、10年後に取り組んでいる研究はなにかと問いかけからはじめ、残念ながら議論は必ずしも10年後の研究には至りませんでした。それでも若手のみなさんそれぞれの発言を集約して、大きく3つのことを記しておきます。

一つは、林産試験場の強みである技術支援員の存在についてです。当場には研究をサポートする技術支援員がおり、日々の研究を支えています。そのサポートが、迅速な研究の実施と結果を出していることに感謝しつつ、その機能をこれからも維持すべきという意見でした。当場の技術支援員はわずか10名とはいえ、全国を見回しても研究現場にこれほどの存在があるところはありません。欧米や中国の研究が上位にランキングされる一つの要因として研究補助者の存在がいわれています。海外の研究環境とは比較にならないものの、この林産試験場の持つ強みが、試験体を素早く準備し、すみやかに試験を実施、結果としてのデータを生み出しています。スピード感ある研究を実施し成果を出す当場の持つ機能の特徴を、若手研究員のみなさんも認識していたことがうれしいことでした。

二つ目として、林産試験場の70年の歴史が、さまざまな研究成果を蓄積しており、現在の試験場を支えているということです。林産試験場には外部から受ける技術相談があります。これらの相談に対しては、今まで取り組んできた諸先輩方の研究成果で答えることも多いとのことでした。過去の研究成果は、ただ貯蔵されているわけではなく、現在も地域からの要望に応えるために折々に引き出されているのです。また、過去の研究成果は、新しい研究成果によって置き換わるのではなく、依然として存在していて、時に新しい研究成果と結びついて新たな知見を生み出しているともいえます。これまでに蓄積した技術は、そのあとに続く新たな研究の土台にもなるのです。継続して研究の実績を積み重ね、すそ野を広くし、それをいつでも使えるようにしておくことが必要であると感じました。

三つ目は、私たちはまだ本当に木材を使いこなしていない、木材の研究をさらに追究すべきという意見です。これからは中高層建築に木材を使う研究が一つの柱となり、それらを進める研究はもちろんのこと、構造物として建物の内部に木材が隠れてしまっても木材を使う意義を提供することも必要で、素材としての木材の良さを引き出すこと、加工等によりすぐれた性能を獲得していくこと、少ない労働力で、コストを低減し、環境負荷をなるべくかけないで製造することなど、まだまだ技術開発の余地があるのです。

今回の若手研究者との意見交換を通じて、林産試験場が持つ強みを活かし、地道に研究成果を積み重ね蓄積していくこと、脱炭素社会の実現に向けてはもちろん、木材が機能できる可能性をさらに引き出していくことを改めて確認しました。若手研究者をはじめとして意欲をもって研究に取り組み、林産試験場の使命を果たしていく、当たり前のことですが、新しい年もまた着実に進めていきたいと思っております。